

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01193

研究課題名（和文）戦国秦漢簡牘の総合的研究 安大簡・清華簡・上博簡・北大簡を中心として

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Qin-Han Bamboo and Wooden Documents in the Warring States Period: the Anda, Tsinghua, Shangbo, and Beida Documents

研究代表者

湯浅 邦弘 (Yuasa, Kunihiro)

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：30182661

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,100,000円

研究成果の概要（和文）：中国学研究で現在最も注目されている新出土文献に注目し、中国思想史および古文字学研究の立場から研究を進めた。具体的な対象資料は、安徽大学蔵戦国竹簡（安大簡）、清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）、北京大学蔵秦簡漢簡である。研究は大きく分けて、国内会合による出土文献の釈読、中国の博物館や大学での竹簡の実見調査、中国の拠点大学との学術交流、などを予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の時期とも重なり、とについては十分な実施ができなかった。しかし、国内会合を中心として研究を進め、大きな成果を上げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発見された多くの資料群を活用することによって新しい学問領域を切り開くことができた。およそ100年前に発見された敦煌文書が世界的に注目されて「敦煌学」という新しい研究領域を創出したように、これら大量の竹簡の整理・解読・研究によって、従来の「哲学」「文学」「歴史」といった学問分野を超える総合的な研究、すなわち「竹簡学」が推進された。またその結果、これまで十分に解明されていなかった中国思想史および古文字学研究の諸課題を解決することができた。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted from the standpoint of the history of Chinese thought and paleoliterary studies, focusing on newly unearthed literature that has attracted the most attention in Chinese studies. The specific materials studied include the Anhui University collection of Warring States bamboo slips (Anda jian), a Tsinghua University collection of Warring States bamboo slips (Tsinghua jian), the Shanghai Museum collection of Warring States Chu bamboo slips (Shangbochu jian) and the Peking University Collection of Qin and Han slips. The research was planned to be divided into three major parts: (1) exegetical readings of excavated documents at domestic meetings, (2) field investigations at Chinese museums and universities, and (3) academic exchanges with base universities in China. Due to the spread of COVID-19, studies (2) and (3) were not fully implemented. Nevertheless, significant results were achieved through research conducted mainly through domestic meetings of Study (1).

研究分野：中国哲学

キーワード：中国哲学 出土文献 竹簡 清華簡 上博楚簡

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者湯浅邦弘を中心とする研究グループは、これまで一貫して新出土文献を主対象として研究を推進し、この分野の研究の進展に寄与してきた。湯浅邦弘『竹簡学 中国古代思想の探究』、福田哲之『説文以前小学書の研究』、中村未来『戦国秦漢簡牘の思想史的研究』などをすでに刊行している。この共同研究開始当初においても、上博簡、清華簡、北大簡など、いずれの簡牘資料も公開は続いており、加えて、安徽大学が2015年に入手した安大簡の公開が、本研究を着想する直接の契機となった。

(2) 郭店楚簡・上博楚簡などの戦国時代の簡牘が発見されてから数十年が経ち、これらの資料を総合的に分析し、中国思想史ならびに古文字学研究の立場からさらに研究を進展させる必要を感じて、この共同研究を構想した。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は、新出土文献を研究材料として、従来の考察では知り得なかった中国古代思想および古文字の様相を解明しようとする意欲的な研究である。具体的には、新出土簡牘である安徽大学竹簡(安大簡)、清華大学竹簡(清華簡)、上海博物館蔵戦国楚竹書(上博簡)、北京大学竹簡(北大簡)を主対象として、順次公開された図版・釈文をもとに読解を進める。また、それぞれの竹簡を蔵有している大学、博物館などを訪問し、新出土竹簡を実見して解読作業を補完するように努める。

(2) 従来の中国古代思想研究や古文字学研究は、伝世の資料を基に多くの研究の蓄積があるものの、研究材料はほぼ出尽くした感があり、それ以上の画期的な新見解は出にくい状況にあったと言える。しかし、そうした中、伝世の資料をはるかに超えると思われる質量の新資料が次々と発見、公開されつつある。それは、今から百年前、敦煌莫高窟蔵経洞から発見された敦煌文書に匹敵するほどの衝撃を持つものである。敦煌文書はその資料を活用した世界的な研究が「敦煌学」として確立したが、1970年代から発見が続いている新出土文献も次第にそれを凌駕しようとしている。代表者の湯浅はこうした歴史的意義を痛感し、数年前から自身の研究著作に「竹簡学」の名を付け、「敦煌学」に匹敵する「竹簡学」の普及につとめているが、まだ道半ばである。本研究の何よりの独自性と創造性は、こうした「竹簡学」を21世紀の新たな学問領域として確立させようとする点にある。

### 3. 研究の方法

竹簡資料積読のための国内会合と竹簡実見のための海外調査を併用する。国内会合では、年数回程度の研究会を開催し、あらかじめ決めておいた分担に従って積読の成果を発表し、全員で議論しながら確定していく。またその成果として論考にできるものは、順次学術誌に発表していく。海外調査については、新出土竹簡を蔵有する大学、博物館に連絡をとった上で訪問し、竹簡を実見調査するとともに、当該機関の研究者たちと学術交流を行う。それぞれの竹簡資料については、以下のように研究を進める。

(1) 安大簡については、そこに含まれている『詩経』、『楚辞』類を検討し、中国思想史、中国古文学史の観点から、『詩経』、『楚辞』の成立について考究する。

(2) 清華簡については、現在、約半分程度が公開された状況であり、我々研究グループは、それらを対象とした研究成果を、すでに『清華簡研究』(汲古書院、2017年)として公開しているが、続く後半部分の分冊について、この研究期間中に研究を進め、『清華簡研究続編』としてその成果を発表できるよう分析を進める。清華簡には、歴史系文献や故事類文献が多く含まれているので、歴史学の分野にも一定の貢献をなすことができると考える。

(3) 上博簡については、公開が予定されている『上海博物館蔵戦国楚竹書』別冊と戦国時代の楚系字書とされる『字析』を主対象として研究を進める。また、公開済みの分冊を再検討し、他の戦国簡とも付き合わせて、その文字学的特質を検討する。

(4) 北大簡については、当初、注目されたのは、『老子』の発見であったが、北大簡(秦簡・漢簡)にはこれ以外にも、文字学資料として『蒼頡篇』、さらに兵書類、数術類、方術類の文献が含まれているので、公開に沿って順次解読を進める。

#### 4．研究成果

(1)それぞれの簡牘資料について分析を進め、研究代表者・分担者とも毎年度、論考を学術誌に発表した。これらの成果を基に、近い将来、共著の学術書を刊行できる段階に至っている。

(2)この内、特に安大簡については、研究代表者の湯浅邦弘が『詩経』の分析を進め、戦国時代の『詩経』写本および先秦から漢代に至る『詩経』テキスト形成史について、世界で初めての論考を学術誌に発表した。また、清華簡については、古佚書『五紀』に見られる世界創世神話、戦争神話を分析した。その成果が評価され、2023年5月開催の東方学会主催第4回中国文化研究国際論壇での発表を依頼された。

(3)分担者もそれぞれの視点から研究を進めたが、特に福田哲之は、古文字学研究の立場から『蒼頡篇』の形成過程を明らかにした。また、竹田健二は竹簡の形制（劃痕、劃線、契口など）の問題に取り組み、それが竹簡配列の復元の有力な手がかりになることを明らかにした。中村未来は、清華簡の分析を通して、中国古代における天（命）と人（心）の関係について分析を進めることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 湯浅邦弘	4. 巻 67
2. 論文標題 『詩経』形成史における安徽大学蔵戦国竹簡の意義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国研究集刊	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田哲之	4. 巻 67
2. 論文標題 戦国竹書の用字・書法と書写者 清華簡『邦家之政』を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中国研究集刊	6. 最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯浅邦弘	4. 巻 2021
2. 論文標題 清華簡『管仲』的政治思想	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 徐少華・谷口満・羅泰主編『楚文化与長江中游早期開發国際学術研討会論文集』（武汉大学出版社）	6. 最初と最後の頁 243-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田健二	4. 巻 2021
2. 論文標題 《越公其事》的竹簡排列和劃痕	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 徐少華・谷口満・羅泰主編『楚文化与長江中游早期開發国際学術研討会論文集』（武汉大学出版社）	6. 最初と最後の頁 306-317
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯浅邦弘	4. 巻 4
2. 論文標題 On Stanzaic Inversion in the Qin feng Ode "Sitie" (Iron-Black Horses) in the Anhui University Bamboo Manuscript of the Shi jing (Classic of Odes)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 bamboo and silk	6. 最初と最後の頁 147-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹田健二	4. 巻 March 2019 Volumn 01
2. 論文標題 左契口再考 契口與劃痕	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 East Asian Sinology 東亜漢学	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村未来	4. 巻 第12輯
2. 論文標題 戦国時期的子産形象 以儒家文献为中心	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 儒蔵論壇 (四川大学出版社)	6. 最初と最後の頁 42-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 湯浅邦弘	4. 巻 68
2. 論文標題 清華簡『五紀』に見える黄帝・蚩尤伝承 王権の由来と正当性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国研究集刊	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田哲之	4. 巻 68
2. 論文標題 北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』と漢牘『蒼頡篇』との本文の対応関係	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国研究集刊	6. 最初と最後の頁 67-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田哲之	4. 巻 56
2. 論文標題 北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章復原	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鳥根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)	6. 最初と最後の頁 39-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村未来	4. 巻 69
2. 論文標題 清華簡『心是謂中』の文献的特質について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国研究集刊	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 湯浅邦弘
2. 発表標題 清華簡『五紀』に見える黄帝・蚩尤伝承
3. 学会等名 中国出土文献研究会 (第74回)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福田哲之
2. 発表標題 北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章復原 『漢書』芸文志所載二十章本考
3. 学会等名 中国出土文献研究会（第74回）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 竹田健二
2. 発表標題 『安徽大学蔵戦国竹簡（一）』所収『詩経』簡の竹節と劃痕
3. 学会等名 中国出土文献研究会（第74回）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村未来
2. 発表標題 中国古代における記憶
3. 学会等名 福岡大学領域別研究チーム研究会（第4回）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 福田哲之
2. 発表標題 戦国竹書の用字・書法と書写者 清華簡『邦家之政』を例として
3. 学会等名 中国出土文献研究会（第73回）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 竹田健二
2. 発表標題 清華簡『四時』積読
3. 学会等名 中国出土文献研究会（第73回）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 湯浅邦弘
2. 発表標題 清華簡《邦家之政》与儒墨的思想
3. 学会等名 吉林大学古籍研究所学术講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹田健二
2. 発表標題 關於《八氣五味五祀五行之屬》の氣概念
3. 学会等名 吉林大学古籍研究所学术講座（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村未来
2. 発表標題 清華簡（八）『心是謂中』積読
3. 学会等名 中国出土文献研究会（第72回）
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 福田哲之
2. 発表標題 北京大学蔵漢簡『蒼頡篇』の分章に関する試論
3. 学会等名 第32回書学書道史学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 湯浅邦弘
2. 発表標題 王権の由来と軍事の正当性 清華簡『五紀』『參不韋』考釈
3. 学会等名 第4回中国文化研究国際論壇（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

中国出土文献研究会 <a href="http://www.shutudo.org/">http://www.shutudo.org/</a>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	竹田 健二  (TAKEDA KENJI)  (10197303)	島根大学・学術研究院教育学系・教授    (15201)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福田 哲之  (FUKUDA TETSUYUKI)  (10208960)	島根大学・学術研究院教育学系・教授    (15201)	
研究分担者	中村 未来  (NAKAMURA MIKI)  (50709532)	福岡大学・人文学部・准教授    (37111)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関